

蘆田裕史著

『言葉と衣服』

アダチプレス、2021 年刊
177 頁、1800 円＋税

国際ファッション専門職大学
高橋幸治

ファッションをその名に冠した大学に勤務しているとはいえ、筆者は直接ファッションについて研究しているわけでも学生たちに講義しているわけでもない。映画や音楽、文学、美術といった文化表象の1つとして、さらには、デジタルテクノロジーが介入しつつある表現領域の1つとしてファッションを捉えているに過ぎない。従って、しばしば目にしたり耳にしたりするファッション業界のニュースやトピックに関しても、どこか冷静に距離を置いて見ているところがある。悪く言えば、関心が薄いということになるのだろうが（くれぐれも言い添えておくが決して興味の埒外にあるというわけではなく、衣服＝非常に特異なメディアの形態としてひとかたならぬ関心を寄せてさえいる）、良く言えば、過度な思い入れがもたらす先入観や鼠目、愛着の強さゆえに陥りがちな視野狭窄から免れているとも言える。

そんなスタンスでもって、時折、ファッションが専門の他の教員の授業における学生たちのプレゼンテーションを見せてもらったりする機会がある。筆者が担当する科目は基本的に座学の講義形式だし、衣服＝メディアと言ってもなかなかピンと来ない学生もいるが、直接ファッションに関わる授業で、討論形式だったり発表形式だったりすると俄然学生たちの目が輝いており、プレゼンテーションの質の高さに驚かされることもしばしばである。しかし、同時に、自分が門外漢だからかもしれないという謙遜めいた疑念を差し挟みつつも、どうしても気になって仕方がないことがある。それは、彼等からほとぼる情熱

や熱意に比して、繰り出される言葉にどうにも新鮮味を感じられないというか、いささか豊穡性に欠けやしまいかという印象にほかならない。

もちろん彼らがまだまだ修学途上にあり、経験の蓄積過程にあることは承知しているし、覚えたての業界用語をいくら駆使したところでお仕着せ感が拭えないのは当たり前だろう。筆者が妙なじれったさを覚えるのは、そうしたプレゼンテーションの技術にまつわる未熟さや不慣れといったことではなく、もっと根源的な、ファッションというものを語る際に用いられる言葉の豊かさやその層の厚み、そうした言葉が持っている意味の深みといった問題である。手っ取り早く言ってしまうえば、ことこのジャンルにおいては、批評語彙が不足しているのではないかと思うことが少なくないのである。言葉に還元できないからこそ映像や音楽といった芸術の形態があるわけだし、無論、感性や感覚にまつわるすべてを言葉の網の目が絡め取れると盲信しているわけではない。しかし、言葉を武器とする文学に対しての文芸批評はもちろんのこと、映画や音楽、美術、さらには演劇、写真、建築といったあらゆる表現においては、評論家だけでなく制作者も参画しての批評語彙の鍛錬と練磨が絶えず行われてきた。「センス」というある種の思考停止ワードに回収させてしまうことなく、それぞれの分野が独自に、言葉による作家や作品へのアプローチを試行してきた。ひょっとすると、ファッションの世界にはそれらに相当する言葉のシビアな磨き上げや削り出しが十分に行われてこなかったのではないか。

ずいぶんと前置きが長くなってしまったが、そんな素人のおぼろげな感慨に確信をあたえてくれたのが、本書『言葉と衣服』である。著者の蘆田裕史はファッション論／服飾史／美術史を専門とする研究者であり、その道の精通者が「思考という行為のためには、あるいはまたコミュニケーションを成立させるに

は、言葉を適切に作ることが必要となる。しかしながら、後に詳しく述べるように、ファッションにまつわる言葉は現在のところ適切に作られているとはいえない(本書、6ページ)と断言しているのだから、筆者が漠然と感じていた懷疑もまんざら見当はずれの憶測ではなかったのだろう。本書の全体の構成は以下の通りである。

- 第一章 ファッションデザインとは何か
- 第二章 スタイルと装飾
- 第三章 モダニズム再考
- 第四章 衣服と身体

著者も述べているようにファッションとは、あるときは「Tシャツやパンツ、あるいはイヤリングや靴などの単体のアイテム」(23ページ)を指すこともあり、あるときは「個別のアイテムを組み合わせることによって人々が作り出す」「ユーザーによる実践」(24ページ)でもあり、またあるときは「社会において衣服や服装が作り出す現象」(24ページ)といった意味で解釈されることもある。つまり、物体でもあり行為でもあるだけでなく、流行という掴みどころのない空気のようなものを言い表す、至極厄介な代物と言える。しかも、個々のデザイナーによる作家性が反映された作品的な側面を持つ場合もあれば、ユーザーの日常性の中に溶け込んだ生活における必需品という側面も持っている。しかし、基本的に「服を着る」という行為はいわゆる衣食住の1つとして数えられ、裸体を禁じられている現代の多くの国や地域では、衣服はあまりにも日々の生活に密着しすぎていて、そこに詳細な分析を施したり、解釈や論評を加えるような対象ではない。それに加えて、著者曰く「ファッションは学術的な研究の歴史が浅いという事実もある」(161ページ)。

従って、ファッションを批評の俎上に載せる際には、近接する他の学問領域の術語や概

念を借用してくるしかない。人間が服を着るようになった理由についてはこれまたさまざまあり、著者によれば、おもに保護、表示、羞恥、装飾、呪術の5つに分類できる。起源論としてのこの問題に対峙しようとするとき、保護の観点であればマクルーハンの身体拡張原理が呼び出されるのだろうし、表示であれば歴史学や社会学、羞恥であれば心理学、装飾／呪術であれば宗教学や文化人類学などが召喚されるのだろう。それはそれでまったく無益ではないし、必要かつ有効な接近方法であることは間違いないのだが、やはり、しょせんは他領域からの借り物であり、すくい取れるものもあればこぼれ落ちるものもある。本書ではインターネットのヴァーチャル空間における人間の身体感覚の変容にまで論及されているが、そうした時代に突入しようとしている現在においてもなお、ファッションだけが他の表現領域において創出された言葉をレンタルして済ませ続けるわけにはいかないだろう。

たとえば、「モダニズム」という言葉1つとってもその用法は非常に曖昧である。「モダニズム」とは周知の通り1920年代に隆興したジャンル横断的な芸術のムーブメントで、装飾性や華美性を極力排し、機能主義に徹したシンプルなデザインを特徴とする。規格品の大量生産を可能にした工業化と機械化が進行する世界において見出された新しい美の観念であり、おもにデザインの世界におけるドイツのバウハウス、オランダのデ・ステイル、建築の世界においてはフランク・ロイド・ライト、ル・コルビュジエ、ミース・ファン・デル・ローエなどが有名である。そして、ファッションの分野においても「モダニズムをシャネルに帰する見解があるが」(32ページ)、それはココ・シャネルのデザインが装飾性よりも機能性を重視したものであり、彼女の活動期間も1920年代をまるまる含むといった理由から、「他分野の概念を何とはなしにあてはめただけのもの」(32ページ)に

過ぎない。こうした事態に対して著者は「ジャンルが違えば歴史も、制作者の技法も素材も、目的も違うため、概念をそのまま適用することはきわめて困難」(33 ページ)と指摘する。

「モダニズム」と同様、シンプルで華飾的ではない作品やデザインに用いられる「ミニマリズム」という言葉についてもやはり曖昧である。ファッションの世界では1990年代を代表するデザイナーの1人であるヘルムート・ラングの服に対してこの表現が使われることが多いが、「そもそもミニマリズムの語は美術と音楽において用いられはじめた」(109 ページ)のものであり、本書の例にもある通り、美術の世界においてはミニマル・アートと呼ばれ、ドナルド・ジャッドなどが、音楽の世界においてはミニマル・ミュージックと呼ばれ、スティーブ・ライヒなどがその代表的な存在として挙げられる。しかし、美術と音楽における「ミニマリズム」の本質は無駄を省いた「最小限」ということではなく、同じ要素や素材の絶えざる「反復」にある。筆者にとっても「ミニマル」と聞いて真っ先に連想するのはまさにスティーブ・ライヒの「Different Trains」といった現代音楽の「反復」をモチーフとした作品群であって、決して「最小限」の意味ではない。ごく日常的なレベルで飾り気のない簡素な状態を「ミニマルな～」などと大雑把に表現することはあるが、それはあくまでも厳密さを欠いた俗用である。ここでも著者は「言葉の濫用は避けなければならない。そうしてしまうと、定義が曖昧なものとなり、物事や現象の理解から逆に遠ざかってしまうし、逆に参照元の理論も不安定になってしまいかねない。ときには他分野の用語の適用をあきらめるいさぎよさも必要だろう。私たちはそのジャンルの固有性を考えながら、適した概念をあてはめていかねばならない」(114 ページ)と注意を喚起する。

冒頭に記した筆者の素朴な感慨をここでもう少しだけ披瀝しておく、たとえば学生た

ちがプレゼンテーションの中で何気なく多用する「自分に似合う服」と言ったときの「似合う」とはいったい何を意味しているのか。ユーザー自身が描く自己イメージと齟齬がないことをいうのか、自己イメージよりも少し良い方向に、つまり「盛れている」ときにその言葉を使うのか、はたまた、自分の身体のコМПЛЕКСをうまく隠しおおせている状態をいうのか(顕現しつつ秘匿するというのはメディアの大きな特徴の1つである)。ことによると自己イメージなど二の次、三の次で、年齢にふさわしいという意味であるかもしれないし、社会的な地位にふさわしいという意味かもしれない。業界に身を置く人々からすれば取るに足りないつまらぬ問題なのかもしれないが、部外者からするとこうしたことがいちいち気にかかってしまうのである。今後、服選びにもAIなどの技術が応用される時代が到来するだろうけれども、その際、重要になるのは言葉による感覚の厳密な定義であるということをおぼえてはならない。感性的なものをいかに言葉によって細分化し、さらに数値化していくかが、ファッションとサイエンスが融合するための条件となるだろう。

本書において蘆田はファッションや衣服に内在する言説の確立の困難性を是認しつつも、言葉による新たな把握の試みの必要性を説く。その姿勢は「おわりに」における「美術、デザイン、建築、音楽、映画などの批評や研究でこれまで言葉の定義をしながら理論をアップデートしてきたことを、ファッションだけが諦めるわけにはいかない」(164 ページ)という言葉に集約されていると言っているだろう。これまで数々の哲学者や思想家が言葉の仮象性や限界性についてさまざまな角度から考究し、議論が行われてきたが、思考を発動させるためには言葉によるほかないことは事実である。逆に言うと、新しい言葉ができれば新しい思考が生まれ、新しい感性や感覚の覚醒を触発する。専門職大学という新

たなカテゴリーとして設置された本学には、これまでの教育機関とは異なる多くのミッションが課せられているわけだが、本書で提案されている「言葉と衣服」の関係をアップデートすることによってファッションに新たな視座と論点を持ち込むこと——これこそが実は重要な使命であり、喫緊の課題なのかもしれない。

田中ひかる著 『生理用品の社会史』

角川書店、2019年刊
300頁、960円+税

国際ファッション専門職大学
河西瑛里子

「ちょっと生理用品、見てもいいかな」

久しぶりに会った従姉とお茶をした帰り際、たまたま立ち寄ったマルイで、2人でじっくり最新の生理用品を見ることになった。彼女にはもうすぐ10歳になる娘がいて、いつ生理が来てもおかしくない年頃。最近は使い捨てナプキンやタンポン以外にも、いろいろな商品が出ているから、どれがいいか、自分でいろいろ試しておきたいのだから。経血を吸収してくれるムーンショーツや繰り返し使える布ナプキン。そこには販売されていなかったが、膣内に挿入するシリコン製の月経カップというものもある。どれもそれなりにかわいく、「いろいろあるねー」と話が弾む。

本書を手にとったのは、それから数週間後のことだ。著者は生理用品や月経観について研究している歴史社会学者らしい。本書の構成はつぎの通りである。

第一章 ナプキンがなかった時代の経血処置
——植物から脱脂綿まで

第二章 生理用品の進化を阻んだ月経不浄視
——「血の穢れ」の歴史

第三章 生理用品が変えた月経観
——アンネナプキンの登場

第四章 今日の生理用品——ナプキンをめぐる
“イデオロギー”

第一章では、日本で生理用ナプキンが登場するまで、行われてきた経血処置について、時代を追って解説している。

女性が経血の処置をいつごろから始めたのかはわからない。しかし、縄文時代の遺跡から麻が出土していること、『魏志』倭人伝にも麻の使用について記載されていることから、当初は麻のような植物の葉を使用していたと考えられる。平安時代になると、大陸から絹が伝わる。貴族たちは絹を袋状に縫い合わせ、その中に真綿を入れたものをナプキンのように使っていた。江戸時代からは布だけではなく、紙も使われるようになった。

明治時代以降、経血処置について書かれた文献が増えてくる。当時の国家目標であった「富国強兵」のため、健康な兵士や労働者を生む「健康な母体」の育成が求められ、その流れで月経や月経時の行動に関し、医師たちの意見が求められたのだ。主な経血の処置法は、江戸時代と同様、禪のように布を縫い合わせた木綿製の「丁字帯」であったが、使用していた布や紙は不衛生だったようだ。ただし、働く女性の経血処置については等閑視されていた。

明治時代、大正時代にかけては、ゴム製や布製の「月経帯」が製品化されていく。ただし高価だったため、紙や布、脱脂綿を膣に詰めるタンポン式の処置法の方が一般的であった。月経帯の量産が始まるのは、昭和初期だ。女性たちの洋装化が進み、月経帯はベルト式からズロース式(ショーツ型)が一般的になっていく。太平洋戦争中は、脱脂綿が配給制となり、ぼろ布などを直接膣に詰めたりする処置が行われていた。

生理用品が長い間、改善されなかった1つの理由に、著者は月経回数を挙げている。